

諸帳簿よりみた呉服商S家の商法と住民の
衣生活について一大正初期を対象として一

県立米沢女短大の徳永幾久
聖和学園短大石川妙子 雁部愛
郡山女大家政園口喜左門馬子佐原夏

目的 住民の衣生活を販売者側からみて考察をつづけてきたが、本報は大正初期の呉服商S家の諸資料に基づき 販売内容の実態を分析し 当時の主婦達かどの様な購買方法をとったのか 当時の呉服商の商法と住民の衣生活の様相を推考する。

方法 S家の大正5-6年の売立帳 当座帳 嵩控帳を中心とし 他邦注文調帳や当時の新聞記事 その他参考文献など参照し考察。

結果 1) S家では旧正月の初売りはその年の商売の成果に関連するので、商売の力量をかけて行うか 大正5年の売立商品の売行は台で モスの寄せ切れ モス半衿 縞前掛が主で 6年になり 亘斯縞 ネル腰巻が売れ商品の $\frac{2}{3}$ を消化した。特別商品も5年には流行の亘斯ものを出したが売れず 6年に景気上昇し 縞双子 更サ形 ヂリヤス等が売れた。2) 総年商売上高の47%が切れ、38%が出来上り品 残りが及物である。又年間販売件数も64%が切れ、28%が出来上り品、8%が及物で 売上、販売件数共 切れに集中し /日37回の販売件数中24回(65%)が切れである。3) S家の切れ販売法は 寄せ切れと及末満の縞緋切れの二方法で 売品の76%は寄せ切れである。4) 及物は /日3及売れ2及は木綿物である。5) 出来上り品の30%は手拭 足袋で 洋服 ズボン等の洋風物は極少で 和服のコート 羽織が売れた。6) 寄せ切れの内容は 友仙 ネル 更サ モスの端布で その中に他地方の見本切れを1~2切入れた。以上 S家の商売が寄せ切れに集中したのは 当時不景気で及売りが無理と見通して 上方の見本布を寄せ切れに組み入れ、主婦達に安価に入手出来る流行を提供した S家の徹底した商人の意思によるものと思われる。